

京都・鳥羽離宮跡

とばりきゅう

1 所在地 京都市伏見区竹田小屋ノ内町・浄菩提院町

2 調査期間 一一九八四年（昭59）四月～九月、二一九八四年一〇月～一九八五年二月

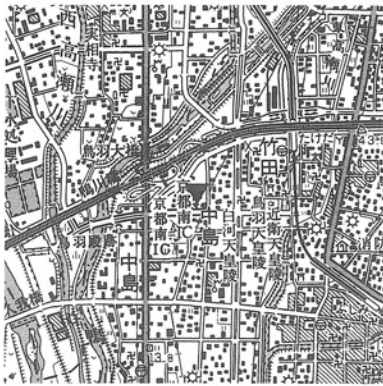
3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

4 調査担当者 鈴木久男・吉崎伸

5 遺跡の種類 離宮跡

6 遺跡の年代 平安時代後期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部・京都東南部)

鳥羽離宮は応徳三年（二〇八六）白河天皇の後院として平安京の南郊、鴨川と桂川が合流する地点の北側に造営が開始された。後には鳥羽天皇によって事業が継続され、一二世紀半ばまで続いた。百余町に及ぶ広大な敷地には数カ所に御所と御堂からなる建物群が営まれ、それを取り巻くように広大な園池

が配されていた。

今回報告する鳥羽離宮第九七次及び一〇二次調査は、田中殿とよばれる御所に付属する御堂、金剛心院の調査である。金剛心院は鳥羽法皇によって仁平三年（一一五三）に造営が開始され、院内には釈迦堂と九体阿弥陀堂が造られた。これまでに実施された調査で、東西一六五m南北一七一mの寺域の中央部に釈迦堂、その南西に九体阿弥陀堂とみられる基壇が検出されており、寺域の東側に広大な園池が確認されている。

木簡類は、第九七次調査において園池（池一四）から一点、第一〇二次調査において池への導水路（溝四〇）から一点、計二点出土した。これらの調査では、他に木製漆塗りの垂飾・光背・台座、金銅製の瓔珞・垂飾・卒塔婆などの仏教遺物が多く出土している。

8 木簡の釈文・内容

一 第九七次調査

(1) □□□□

(128)×37×4 061

卒塔婆の五輪塔部分に梵字らしきものが書かれている。同じ遺構からは、他にも一二点の卒塔婆が出土しており、いずれも厚さ七mmほどの板材の頭部を五輪塔の形に成形したもので、脚部の形状によって二種類に分けられる。脚の先端を尖らせるものと、先端を平た

く切り落とすものである。頭部の形状によっても、完全な形の五輪塔を表現したものと一部を省略したもの、二種類に分けることができる。また、五輪塔の下部に仏像の墨絵を描いたものが二点あり、風輪や空輪を墨で黒く塗りつぶしたものもある。また、卒塔婆の約半数には中央部に一〜四個の釘孔があいており、一部に木釘が残存している。

二 第一〇二次調査

(1) 「物忌咄天北急々律」^{〔令カ〕}

493×58×7 051

呪符（物忌札）である。上端は圭頭状に切り欠き、下端は両側面を削って尖らせている。

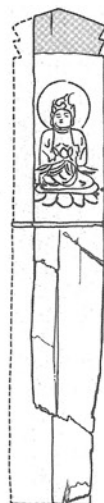
9 関係文献

（財）京都市埋蔵文化財研究所編『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告一〇、二〇〇二年）

（吉崎 伸）



一(1)



卒塔婆



卒塔婆



卒塔婆



卒塔婆



二(1)